

■ 作曲 大澤 壽人

OSAWA Hisato

1906年8月1日神戸に生まれ、キリスト教に囲まれた環境で育った。1930年関西学院高等商業学部卒業後に渡米。ボストン大学音楽学部とニューイングランド音楽院で学び、急成長を遂げる。卒業作品の《ピアノ協奏曲》を含む交響大作群は日本最初期の作品。新進作曲家としてボストン音楽界で知られる様になり、1933年には日本人として初めてボストン交響楽団を指揮した。1934年フランスに渡り、翌年パリで日本人初となる自作自演の大演奏会を開催。作品も指揮も絶賛される華麗な楽壇デビューを果たした。1936年帰国し、神戸女学院の教壇に立ちつつ新作発表を続けるが、先鋭の作品は理解されず、時代に阻まれ活動は容易ではなかった。戦中戦後はラジオや映画、舞台用音楽へ創作ジャンルを拡げ、文壇や画壇の芸術家達と共に多彩な活動を繰り広げる中、1953年10月28日急逝。長らく忘れられていたが、2004年代表作CDのリリース以来、現代に通じるその斬新な作風によって、再評価が進んでいる。(生島美紀子)



© 神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」

● 小ミサ曲

Petite messe

生島 美紀子 (大澤資料プロジェクト代表)

《小ミサ曲 *Petite messe*》はパリで1935年3月に作曲された「混声合唱と管弦楽のための」作品で、日本人による演奏会用音楽作品としてはおそらく初のミサ曲である。

大澤は前留学地のアメリカで才能が開花した。それまで独学だった作曲を正式に学び始め、わずか4年の間に、日本最初期の《ピアノ協奏曲》、戦前の邦人作品の中で最大規模の《交響曲第一番》、日本初の《コントラバス協奏曲》など、交響大作6作を含む総譜1000枚近くを完成。アメリカに亡命したA・シェーンベルクの影響を受け、師のF・コンヴァースや指揮者のS・クーセヴィツキが認める前衛派の新進作曲家として、同地音楽界で名を挙げた。1933年6月には日本人として初めて、ボストン交響楽団のメンバーから成るボストン・ポップス・オーケストラを指揮し、自作《小交響曲》を披露した。

大澤がフランスに渡ったのは、ボストンでの成功によって、支援者達がパリ行きを勧めたことが一つの理由である。大澤は欧米で活動できる作曲家になりたいと大志を抱き、「フランス六人組」や「パリ楽派」が活躍中の世界楽壇を目指した。

1934年10月にパリに到着した大澤は、翌年1月にエコール・ノルマル音楽院で大家P・デュカの作曲クラスに入り、また名教師N・ブーランジェのレッスンを受け始めた。クラスが始まるとデュカは意外な古典尊重主義で、「ウルトラモダン」を目指す大澤の作風に対立的な見解を示したため、喧嘩別れの様に大澤は教室を出た。

後日、デュカに詫言いで作品を見せよう、と創作を進めたのが《小ミサ曲》だった。〈キリエ〉〈グローリア〉を完成し、〈クレド〉14小節まで作曲した所でデュカが突然亡くなり、落胆の余りに書き続けられなかった。はからずも大澤はデュカ最晩年の弟子となり、作品を持って会いに行くという望みも叶わず、全体が未完となった経緯がある。

作品を支えるのは、緻密な構成力である。憐れみの讃歌〈キリエ〉、栄光の讃歌〈グローリア〉

のどちらも、端正な対位法の書式を特徴とする。また調性の中に、不協和音を包含する 1930 年代の和声イデオムや日本的な五音音階を感じさせるなど、28 歳の作品でありながら、既に独自の世界が表されている。〈グローリア〉は殊に、調号・拍子・テンポの変化によって 5 つの部分形成され、祈りの言葉と音楽の劇的要素が組み合わされて各部分を密にしながら、最後の「アーメン」に至る。

大澤の宗教音楽は、作曲・編曲を合わせて 1000 に近い膨大な作品群の中で、一条の光のような役割を担っている。クリスチャンの母の影響を幼い頃から受け、ミッションスクールで学んだ大澤にとって、キリスト教は精神的支柱であった。留学前から帰国後の戦中戦後まで、このジャンルの作品を必ず遺しており、合唱音楽としての《小ミサ曲》は、大戦末期に人知れず作曲された名作、《ベネディクトス幻想曲》につながる。

パリ時代を要約すれば、滞在 1 年 3 ヶ月の間に

《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》などを含む約 14 作品、総譜枚数にして 530 頁を書き上げ、溢れる創作力を示した他、1935 年 11 月にはコンセル・パドゥルー管弦楽団を率いて、作品発表と指揮による演奏会をサル・ガヴォーで開催。J・イベルや A・オネゲル、H・ビュッセル等が来場し、演奏会評でイベルが「天賦の才能」と呼ぶなど、新聞各紙で称賛された。大戦前夜のヨーロッパで実力を認められた大澤の成功は、日本洋楽史における輝かしい一頁と言える。

《小ミサ曲》は 2006 年に大澤家から神戸女学院へ寄贈された 3 万点の遺品資料、「大澤壽人遺作コレクション」の調査過程で発見された。創作以来、81 年を経て本日の初演を迎える。原曲の楽器編成は「フルート、オーボエ、クラリネット 2、ホルン 2、タムタム、弦 5 部」で、ピアノ伴奏版へ(2011 年生島)、さらにオルガン伴奏版へ(2016 年廣田)、2 回の編曲が行われた。これに際しては、同学院から自筆譜複写などが提供された。



《小ミサ曲》自筆譜より第 1 頁
© 神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」

生島 美紀子

IKUSHIMA Mikiko

スタンフォード大学大学院修了。大阪大学にて博士号取得。編集代表した『煌きの軌跡—大澤壽人作品資料目録—』は 2008 年音楽クリティック・クラブ特別賞。09 年「大澤資料プロジェクト」設立、作品展主催・講演会・CD 制作等の普及活動にあたる。17 年『評伝』出版予定。



編曲 ■
廣田はる香
HIROTA Haruka

栃木県宇都宮市生まれ。武蔵野音楽大学音楽学部作曲学科卒業。東京藝術大学大学院修士課程作曲専攻修了。2007 年奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門一般の部入選、14 年同コンクール同部門第 2 位。15 年洗足現代音楽作曲コンクール (A 部門オーケストラ作品) 入選、JFC (日本作曲家協議会) 作曲賞入選。これまでに作曲を名倉明子、田中均、土田英介の各氏に師事。